

Title	アクションリサーチにおける〈ままならなさ〉の研究：「阪神大震災を記録しつつづける会」における協働的実践の分析
Author(s)	高森, 順子
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81989">https://hdl.handle.net/11094/81989</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 高 森 順 子 )

## 論文題名

アクションリサーチにおける〈ままならなさ〉の研究  
 ——「阪神大震災を記録しつづける会」における協働的实践の分析——

## 論文内容の要旨

本研究は、アクションリサーチにおける研究者と研究対象者の双方、またはそれぞれに個別に現れる〈ままならなさ〉という現象に注目することで、アクションリサーチの方法論的問題を検討するものである。

アクションリサーチとは、研究者が「研究」という異物をある現場に持ち込み、現場の当事者とともに協働的实践を行うことによって社会のベターメントを目指す研究スタンスであるが、それゆえに現れるさまざまな「意のままにならない」状況と、そのような状況における研究者と研究対象者の感覚がある。これを的確に捉え記述することによって、エスノグラフィは読者と現場をアクチュアルにつなぐ回路となりうると考えられる。しかし、ベターメントプロセスを記述することを志向する多くの研究はそうした〈ままならなさ〉を見逃してきたといえる。これに対し、本研究では、阪神・淡路大震災の体験手記を出版する市民団体「阪神大震災を記録しつづける会」において筆者自身が関与してきた10年に亘るアクションリサーチを記述するという実践を通じて、〈ままならなさ〉を織り込む表現の方法論的条件と意義について検討した。

第1章では、アクションリサーチの定義をレビューし、特にアクションリサーチのコントロール不可能性と、高い倫理観の要請という引き裂かれた状況からくる〈ままならなさ〉に研究者がさらされていることを指摘した。さらに、研究者は現場の諸問題を覆い隠す言説をさらに強化するリスクと、複線的なプロセスを単純化するリスクを抱えながら、研究知見を言語化することを迫られていると指摘した。そして、そのリスク回避の解決の糸口として、近年の生活史調査の研究事例を参照し、研究者が〈ままならなさ〉をはらんだ「断片」を描くことの必要性を論じた。

第2章では、本研究が考察対象とする「記録しつづける会」について、同会の手記集を質的、量的に分析することでアクションリサーチ以前の活動の特性を考察した。その結果、同会の活動には編集者と執筆者による手記の共同構築という特異なプロセスがあったことを明らかにし、同会が形成するコミュニティの合理性を理解する補助線とした。

第3章では、「記録しつづける会」で展開された約10年に亘るアクションリサーチを、私と手記執筆者に現れる〈ままならなさ〉に着目しつつエスノグラフィとして記述した。そこでは主に、手記執筆者同士の交流の場「手記執筆者の集い」、2015年と2020年に刊行された2冊の記録集の出版という協働的实践をアクションリサーチの画期として描いた。

第4章では、アクションリサーチの前提条件とエスノグラフィを分析対象として、アクションリサーチの画期をなす協働的实践と、そこに現れる〈ままならなさ〉を考察することで、コミュニティの合理性を検討し、〈ままならなさ〉がアクションリサーチの展開動因にもなっていたことを明らかにした。

最終章では、そうした〈ままならなさ〉をエスノグラフィに記述していくための方法論とその意義について論じた。特に、アクションリサーチの動作主である研究者と研究対象者が預かりしらぬところでベターメントが波及していくことに着目し、アクションリサーチが「誤配」されることの可能性を指摘し、それを導き入れるための方法として本を「綴じる」というふるまいの特性について検討した。その上で、研究者がアクションリサーチを〈ままならなさ〉を織り込んだものとして「綴じる」ための方法論的条件として、エスノグラフィの過度の物語化を回避することと、多様な「読み」を肯定することを挙げ、〈ままならなさ〉を引き受けるアクションリサーチの方法論の確立の基礎を提示した。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 高 森 順 子 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	渥美 公秀
	副 査	教 授	稲場 圭信
	副 査	講 師	山田 一憲

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、アクションリサーチにおける研究者と研究対象者の双方、またはそれぞれに個別に現れる〈ままならなさ〉という現象に注目することで、アクションリサーチの方法論的問題を検討するものである。

アクションリサーチとは、研究者が「研究」という異物がある現場に持ち込み、当事者とともに協働的实践を行うことによってベターメントを目指す研究スタンスであるが、それゆえにさまざまな「意のままにならない」状況と、そこで引き起こされる感覚がある。これを的確に捉えることによって、エスノグラフィは読者と現場をアクチュアルにつなぐ回路となりうると考えられる。しかし、ベターメントプロセスを記述することを志向する多くの研究はそうした〈ままならなさ〉を見逃してきたといえる。これに対し本研究では、阪神・淡路大震災の体験手記を出版する市民団体「阪神大震災を記録しつづける会」において筆者自身が関与してきた10年に亘るアクションリサーチを記述するという実践を通じて、〈ままならなさ〉を織り込む表現の方法論的条件と意義について検討した。

第1章では、アクションリサーチの定義をレビューし、特にアクションリサーチのコントロール不可能性と、高い倫理観の要請という引き裂かれた状況からくる〈ままならなさ〉に研究者がさらされていることを指摘した。さらに、研究者は現場の諸問題を覆い隠す言説を強化するリスクと、複線的なプロセスを単純化するリスクを抱えながら、研究知見を言語化することを迫られていると指摘した。そして、そのリスク回避の解決の糸口として、近年の生活史調査研究を参照し、研究者が〈ままならなさ〉をはらんだ「断片」を描くことの必要性を論じた。

第2章では、本研究が考察対象とする「記録しつづける会」について、同会の手記集を質的、量的に分析することでアクションリサーチ以前の活動の特性を考察した。その結果、同会の活動に編集者と執筆者による手記の共同構築という特異なプロセスがあったことを明らかにし、コミュニティの合理性を理解する補助線とした。

第3章では、「記録しつづける会」で展開された約10年に亘るアクションリサーチを、私と手記執筆者に現れる〈ままならなさ〉に着目しエスノグラフィとして記述した。そこでは主に、手記執筆者同士の交流の場、2015年と2020年に刊行された2冊の記録集の出版という協働的实践をアクションリサーチの画期として描いた。

第4章では、アクションリサーチの前提条件とエスノグラフィを分析対象として、アクションリサーチの画期をなす協働的实践と、そこに現れる〈ままならなさ〉を考察することで、コミュニティの合理性を検討し、〈ままならなさ〉がアクションリサーチの展開動因にもなっていたことを明らかにした。

最終章では、そうした〈ままならなさ〉をエスノグラフィに記述していくための方法論とその意義について論じた。特に、アクションリサーチの動作主である研究者と研究対象者が預かりしらぬところでベターメントが波及していくことに着目し、アクションリサーチが「誤配」されることの可能性を指摘し、それを導き入れるための方法として本を「綴じる」というふるまいの特性について検討した。その上で、研究者がアクションリサーチを〈ままならなさ〉を織り込んだものとして「綴じる」ための方法論的条件として、エスノグラフィの過度の物語化を回避することと、多様な「読み」を肯定することを挙げ、〈ままならなさ〉を引き受けるアクションリサーチの方法論の確立の基礎を提示した。

本研究はアクションリサーチという研究スタンスの方法論的課題を、10年にわたる申請者の丹念なアクションリサーチから提出し、新たな方法論的条件を提出している。これは、グループ・ダイナミックスおよびアクションリサーチの研究の理論的アップデートに寄与しうる知見である。

以上より、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。